

# 北海道の城郭～城館・陣屋・チャシ

窪田 剛

平成17年1月8日（土）

## 1. 日本の城

「城」といわれて、まず思い浮かぶものはなんでしょう。天に聳える白亜の天守閣でしょうか？実は日本の歴史の中で築かれた城は3万とも5万ともいわれていますが、その中で普通イメージされる天守閣を備えた城、すなわち江戸時代以降築かれた近世城郭と呼ばれるものは、ほんの一握りに過ぎません。

ほとんどは中世に築かれた土塁や空堀で防備された中世城郭といわれるものです。

本来、城という字は「土」と「成」という字でできていることから分かるように、住居や村社会を獣や他人、異集団から遮り防御する為に、その周りに溝（堀）を掘り、掘りあげた土を盛り上げて垣（土塁）としたものを指し、堀や土塁を築いて防備を固めた中世城郭と呼ばれるものが城のほとんどを占めるというのもうなずけるところです。

日本における城を時代をたどってみると、まずは弥生時代に稲作生産のため定住し村が形成されると、それを異集団や野獣から守るために、居住地域の周りに堀と土塁をめぐらした「環濠集落」と呼ばれるものができました。

大和王権の時代になると、北九州など西国で**神籠石式山城**及び**朝鮮式山城**と呼ばれるものが現われます。武士の時代には、館の周りに小河川や沢水をめぐらした方形館と呼ばれるものが現われますが、これはあくまでも土地支配の拠点であって、戦略的意味は乏しいものでした。

南北朝期以降になると、在地支配のための館から戦闘拠点にふさわしい地を選んで山城を構築するようになり、室町期の守護あるいは守護代、有力国人らの拠点は山城と麓の館をセットにした築城方法がとられるようになってきました。

戦国期には、領国内の一円支配のため、家臣団を本城に住ませるようになり、支城網が整備されました。一方、武器も刀や矢から長柄鎗・鉄砲などが主流になり、空堀の規模が拡大され、さらに西国では石垣の利用が見られはじめました。また、永禄から元亀・天正年間になると、主殿建築の中心に望楼を載せた「殿主」建築が出現し、天守の建築が流行し始めました。

天正年間から寛永年間の間は、城郭の完成期に入り、各地で築城工事が行われ、全国の有名な城郭はほとんどこの時期に完成しました。しかし、元和元年に一国一城令が發布されると、一部の例外を除き大名の居城以外の城郭は破却され、数千あった城郭は二百ほどになりました。

明治になると、新政府は「存廃城郭決定」を各県知事に命じ、約二百五十の城郭と十九の要害(仙台藩領内の支城)が城の機能を失い、存城となった城は陸軍省に引き渡され、それ以外の廃城地は順次取り壊されたのでした。

## 2. 北海道の城郭・概要

いわゆる「城」という言葉から普通思い浮かぶ日本式の城(近世城郭)は、北海道では松前(福山)城ただ一つです。ですが、この松前城は日本の諸大名が造ってきた城とはその築城目的が違います。

北海道にある城には大きく分けて先住民であるアイヌの人びとが立てた「**チャシ**」と和人が建てた物の2つに大別され、さらに和人が建てた物も、中世に作られた「館」(たて)と呼ばれるもの、それから松前城・五稜郭、そして幕末に東北諸藩が建てた陣屋などと、大きく2つのグループに分類することができます。

まずは室町時代から戦国時代にかけて道南に作られた「**館**」(たて)です。北海道の館ではいわゆる「**道南十二館**」がよく知られていますが、それらの館主との権力抗争に勝ち抜き、のちに松前藩主と

なった蠣崎氏(のちの松前氏)が建てた福山館(松前城の前身)も幕府に対しては「館」と称していましたが、アイヌに対しては「城」と称し、やはりアイヌを威圧する役割があったと思われます。

それに対し、**松前城、五稜郭、東北諸藩の陣屋**は当時北辺の海に頻繁に出現するようになっていた外国勢力に備えるためという性格を持ちます。そのほとんどが、日米和親条約が調印された安政元年(1854)年以降に竣工していることがそれを物語っています。

そういう意味で、北海道の城はアイヌや外国船など日本語の通じない相手を対象としている点で、日本の城郭の中でも特異な存在といえるでしょう。

### 3. 和人の館

河川沼沢に面する丘陵などの自然地形を利用した小規模な砦を東北地方では「館」と書いて、たて、たちとよび、かん、やかたとはいいません。この「館」あるいは「楯」の分布は東北六県の中でも青森、岩手に多く、北海道の渡島半島にも分布が見られます。

渡島半島の海岸地帯に築かれた和人の館は 15 世紀から 16 世紀にかけて築かれたもので、アイヌ及び関西商人との交易をその経済基盤としていたようです。

松前に関する古い文献「新羅之記録」によると、15 世紀中頃には次の十二の館があったとされています。(いわゆる「道南十二館」)

館名	所在地	館主
①志濃里(志苔)館	函館市	小林太郎左衛門良景
②箱館	函館市	河野加賀右衛門政通
③茂別館	上磯町	下国安東八郎式部大輔家政(下国守護)
④中野館	木古内町	佐藤三郎左衛門尉季則
⑤脇本館	知内町	南条治部少輔季継
⑥穩内館	福島町	蒋土甲斐守季直
⑦覃部館	松前町	今泉刑部少輔季友
⑧大館	松前町	下国山城守貞季・相原周防守政胤(松前守護)
⑨禰保田館	松前町	近藤四郎右衛門季常
⑩原口館	松前町	岡部六郎左衛門季澄
⑪比石館	上ノ国町	厚谷右近将監重政
⑫花沢館	上ノ国町	蠣崎修理大夫季繁・武田若狭守信廣(上ノ国守護)

十二館のうち、ほとんどは現在では所在地がわからなくなったり、遺構が消滅したりしていますが、函館にある志苔館と上磯の茂別館、上ノ国にある花沢館は遺構も良好に残り、国の史跡に指定されています。

**志苔館**は東西約 152m、南北 112m の台地平坦部が高さ 1.5 ~ 3m の土塁によって囲まれ、周囲は台地に続く部分は濠で切断し、他の面は急峻な崖をなしています。この館は長禄元年(1457)、永正 9 年(1512)の二度に渡りアイヌの攻撃を受けて陥落しています。

長禄元年のコシャマインの戦いの際には道南十二館のうち上記の志苔館を含め十館が陥落し、**茂別館・花沢館**の二つのみが陥落せず、逆に花沢館の武田信広がコシャマインを倒し、その子孫がのちの松前氏となって、蝦夷地の支配者となっています。

ところで、上ノ国の花沢館の隣には**勝山館**があり、全長約 270m、最大幅約 100m と非常に規模が大きいものです。発掘調査の結果、その主体部の中央線上に通路が通っており、その左右に溝、濠等で囲



図1 渡島半島の館分布図(▲道南十二館)  
(『日本古代文化の探究・城』より)

まれた地割が作られ、建物が建てられていたと推測されています。つまり、館の周辺の海岸部等に平坦地があるにも関わらず山城の中に集住していたようです。また上ノ国から蠣崎氏(のちの松前氏)が移り住み本拠とした松前の**大館(徳山館)**も、その主体部が非常に広く、勝山館と同様、館内部に集住してた可能性が考えられます。これはやはりアイヌの攻撃を想定し、攻撃を受けた際には武士だけでなく商人や職人なども収容して籠城するため、極力大きな選んで築城したように思われます。

いずれにしてもこれらの館は、蠣崎氏(松前氏)が蝦夷地での支配権を強めていく中で、次第に廃されていくことになりました。また道南十二館の館主たちの子孫もそのほとんどが蠣崎氏に臣従し松前藩士となっています。

また以上紹介した道南十二館及び勝山館のほか、戸井町(現函館市)に**戸井館**、函館市根崎町に**弥右衛門川館・与倉前館**、上磯町に**矢不來館**、上ノ国町に**州崎館**、厚沢部町に**国分館**、江差町に**泊館**がありました。

#### 4. 幕末期に建てられた城・陣屋・台場

##### 〔幕末の東北六藩による蝦夷地分治〕

松前氏は慶長 11 年(1606)大館(徳山館)に代わる本拠として大館の南側に**福山館**を築きました。これは陣屋程度の貧弱なもので、江戸時代後期に北辺の海に頻繁に出没するようになっていた外国勢力に備えるには不安がありました。

そこで、幕末の嘉永 2 年(1849)、幕府は北方警備を目的に十七代松前崇廣に築城を命じ、長沼流兵学者市川一学の縄張りにより旧福山館の拡張・改築を行いました。これが**福山城(松前城)**です。

松前城が北方警備との名目で築城されたのと同様に、当時北辺の海に頻繁に出現するようになっていた外国勢力に備えるため、多くの城郭がこの時期に築かれています。

そのほとんどが、日米和親条約が調印された安政元年(1854)年以降に竣工していますが、それというのも箱館開港を決定するとまもなく幕府は全蝦夷地を直轄地とし、松前藩には松前を中心とした道南の一部のみを残して、かわりに奥州梁川、出羽東根など三万石を与え、直轄地とした蝦夷地については、安政 2 年、松前藩のほか仙台・盛岡・弘前・秋田の四藩に分担警備させ、ついで同 6 年には、さらに会津・荘内を加えた六藩に蝦夷地を分領、警備の分担をさせました。(図 2 参照)

そこで、北海道各地にこの六藩が築いた陣屋が残されることになりました。以下、この時期に築かれた城・陣屋を各藩ごとに見ていきたいと思います。

##### 〔松前藩〕

まずは松前藩です。上に書いたように幕末の嘉永 2 年(1849)、幕府は北方警備を目的に十七代松前崇廣に築城を命じ、長沼流兵学者市川一学の縄張りにより旧福山館の拡張・改築を行いました。これが**福山城(松前城)**です。一学は、松前は海に面し背後地は狭く、発達した火砲に備えるには不向きであることから、箱館付近の桔梗野庄司山麓に移城すべきと献言しましたが、藩臣は移城、新築には膨大な費用がかかること、松前は蝦夷地第一の都市で、松前氏累代の墳墓地であること、火砲に備えるには多くの砲台を築造すればよく、福山館を利用拡張すれば経費も削減できると主張し、結局幕府の裁断で松前に築城することが決まりました。

上記のことから、築城に際しては海防について充分考慮し、天守台の石垣を二重にして、天守建物



図 2 蝦夷地各藩分治地図

(『北海道の歴史』榎本守恵 より)

をその内側に低く建てること、海岸に近い三の丸には七座の砲台を築設し、城外にも砲台を配置し、松前城を中心に 37 門の火砲を海に向かって設置し、安政元年(1854)に落成しました。(本邦旧式築城の最後)しかし、明治元年(1868)の箱館戦争の際には土方歳三を隊長とする旧幕府軍の攻撃で落城しました。

またこの時期に松前藩は松前城の他に 2 つの城を築いています。

一つめは上磯にある戸切地陣屋です。蝦夷地が幕府の直轄地となった際に箱館から木古内までの地が松前藩の警備地になったので、この地に衛所を設けることとなり、安政 2 年、5 か月をかけて陣屋は完成しました。この陣屋は 320 ～ 350m 四方の四稜形の郭で、南東角には砲台を設け、砲眼六座を設け、高さ 2.6m の土塁と外周には高さ 2.7 ～ 3.4m の空堀をめぐらしました。万延 2 年(1861)の記録では 152 人、大砲 37 門、鉄砲 59 丁を配置していました。

明治元年 10 月 20 日榎本武揚率いる旧幕府軍が森町鷺ノ木に上陸、同 23 日に旧幕府軍による戸切地陣屋急襲が行われ、松前藩兵は箱館府兵と合流するため、陣屋建物に火を放ち退却しました。

二つめは厚沢部町にある館城です。幕末の松前藩は佐幕派でしたが、慶応 4 年(1868)7 月の下国東七郎ら尊王派の少壮家臣らのクーデターにより尊王へと変貌し、東七郎は松前藩の漁業経済一辺倒を改め、平野の多い厚沢部川流域を開墾し米作地を作るため、その足場としての館を厚沢部川流域に築こうと考え、早速新政府の箱館府に築城の許可を要請しました。そして明治元年(1868)9 月に起工し、約 180m 四方の郭を築き、外側に堀を掘り、その土砂を内側に積み上げて土塁とし石垣積みなどは一切行わず、建物も板材の簡素な建築でした。この第一次計画を本丸とし、二の丸・三の丸と複郭を重ねて将来は砲台も付設し本格的城郭へとする計画でしたが、東北の情勢が不穏だったので、取りあえず建物が完成した段階で藩主徳廣を迎えることにしました。

旧幕府軍が森町鷺ノ木へ上陸し、同月 25 日には五稜郭を占拠し、その後松前に向けて進撃してくると松前藩は、藩主の湯治という触れ込みで家臣を付して館城に向かわせ、松前城には 400 人の兵を配置しましたが、11 月 5 日松前城は旧幕府軍の手に落ちました。軍事方三上超順を総指揮者として抵抗しようという松前藩兵の動きを見た旧幕府軍は、館城攻撃の構えを見せ、稲倉石砦を落としたため、藩主徳廣は滞在 10 日で江差へと逃げ、さらに津軽へと脱出しました。館城に残った藩兵は倍する敵を迎え撃ちましたが、三上超順等の奮戦もむなしく館城は落城、焼失することとなりました。

#### 〔仙台藩(伊達家)〕

仙台藩伊達家は、白老から東の太平洋岸一帯、国後・択捉までと一番広い範囲を担当し、勇払(苫小牧及び鷓川付近)に元陣屋、根室・国後・択捉に出張陣屋を設けるよう命ぜられました。現地調査の結果、勇払は火山灰が厚く堆積しており、地形も陣屋構築に不適であったので、幕府の許可を得て白老に元陣屋を構築することにしました。また出張陣屋も広尾・厚岸・根室・国後の泊・択捉の振別に置くことになりました。

白老元陣屋の配置は連郭式縄張り、外郭と内郭を円環状の土塁・堀・空堀で囲み、内郭は約 1 万 m<sup>2</sup>、外郭は約 6 万 m<sup>2</sup>という広大なものでした。安政 3 年(1856)3 月から陣屋構築にかかり同年 9 月には完成しました。この元陣屋は、丸い土塁と堀に囲まれた正面の大手門を入ると稽古場・長屋跡などがある外郭があり、水堀を渡り門を通ると丸い土塁で囲まれた内郭があり、ここには本陣・兵器庫・米蔵等が並んでいました。また内郭の北の丘陵上には本藩から勸請された塩竈神社がありました。

結局この陣屋は、戊辰戦争で仙台藩が奥羽越列藩同盟の盟主となったため、追討軍が進発して来るというので、急いで陣屋を撤収することになり、仙台藩兵は小樽から船で帰国し陣屋は放棄されました。

また厚岸・根室などの出張陣屋は遺構もなく良くわかっていませんが、広尾の出張陣屋は現在の広尾小学校の敷地内にあり、陣屋内の面積は約 1 万 2 千 m<sup>2</sup>、幅 4m、高さ 1.4m の土塁がめぐり、さらにその外側に堀が取り巻くようになっていたそうですが、現在では土塁が一部残るのみです。

#### 〔盛岡藩(南部家)〕

また盛岡藩南部家は室蘭から恵山岬まで内浦湾沿岸一帯を担当し、箱館に元陣屋、室蘭に出張陣屋

を、長万部・砂原に勤番所を置きました。**箱館の元陣屋**は第一次の蝦夷地幕領時代(1799～1821)に箱館の警備を命じられ建設した陣屋の位置に再建し、周囲に約5mの空堀と土塁がめぐらされ、御用所建物を中心に長屋・蔵など十数棟の建物がありましたが、いずれも仮普請の粗末なものだったそうです。明治元年(1868)旧幕府軍の襲来と政情不安から蝦夷地警備兵を撤退させることとなり、陣屋は廃絶となりました。

**室蘭(モロラン)出張陣屋**は東西約124m、南北約80mで、高さ2～3mの方形の土塁がめぐらされ、全面には水堀、側面には空堀が掘られていました。100人ほどの警備兵が配備され、明治元年まで沿岸警備にあたりましたが、新政府に引き渡すことを避け、同年7月陣屋を焼き払って本藩に引き上げました。また**長万部(ワシヤマンベ)陣屋(勤番所)**も縦約95m、横144m、高さ約2.4mの方形の土塁と深さ約1.5mの堀がめぐらされ、20人ほどで警備に当たりましたが、長万部の海岸は砂浜で遠浅のため、外国船も容易に近づけないとのことで一年あまりで廃されました。**砂原陣屋(勤番所)**も東西約76m、南北約67mの方形で、高さ約3mの土塁、その外側に深さ約2mの空堀をめぐらし、藩士50人ほどが勤番していましたが、明治維新に伴い明治元年7月に陣屋を捨て本藩に引き上げました。

#### 〔弘前藩(津軽家)〕

弘前藩津軽家は箱館千代ヶ岡から恵山岬までと乙部から神威岬までを担当したため、箱館千代ヶ岡に元陣屋を寿都に出張陣屋を置きました。**元陣屋**は約216m四方、高さ2.4～2.7mの土塁及び空堀を配置し、多くの建物があったとされるが、この陣屋の構造等を知る詳しい資料は残っていません。また**寿都出張陣屋**は東西約140m、南北約90mの規模だったようですが、現在全く遺構は残っておらず詳しいことはわかりません。

#### 〔秋田藩(佐竹家)〕

秋田藩佐竹家は神威岬から北蝦夷地(樺太)までを担当し、元陣屋を増毛、出張陣屋を宗谷、北蝦夷地の自主、久春古丹に置いたようですが、その実態についてはよくわかりません。**宗谷の出張陣屋**については宗谷小学校の校庭の一部が陣屋の跡地ではないかともいわれますが、その位置についての史料・文献はなく不明です。

#### 〔会津藩(松平家)〕

会津藩松平家は別海町西別から紋別までを担当し、箱館郊外に戸切地御蔵屋敷を建て、ここを拠点に**標津陣屋**構築の準備を進めました。最終的には十七棟の建物を建築する計画を立て文久2年に6棟が完成しましたが、その後藩主松平容保が京都守護職に任ぜられ、藩財政が窮乏したことなどから以後の建築は中止されたものと思われます。会津藩は明治元年4月まで毎年200人ほどの藩士をこの地に送り沿岸の警備に当たらせていたようです。

#### 〔荘内藩(酒井家)〕

荘内藩酒井家は歌棄から天塩に至る地(秋田藩元陣屋の置かれていた増毛付近をのぞく)の警備を命じられ、浜益毛(現在の浜益)に元陣屋(**ハママシケ陣屋**)を置くこととなりました。これまで幕府から北方警備を命じられた各藩は異国船の侵攻に備えての陣屋構築でしたが、荘内藩は領地開拓の目的も考慮して陣屋構築を計画し、浜益川及びその支流に開ける開墾適地を見渡せる場所を選び、浜益川を天然の堀とし、海岸から500mほど東に入った丘陵部に大手門を設け、5haほどの土地を開いて本陣としました。また、浜益川から陣屋下まで水路を掘り船が荷揚げできるようにしました(この堀は千両堀といわれたが、現在は無い)。また本藩と遠く離れた地を長期にわたって警備するためには食糧自給が望ましく、1300余人もの農民の移住だけでなく日常生活に必要な大工・瓦職・炭焼などの諸職人も優遇して移住させました。しかし明治維新の際には全員帰国し、田畑は荒れ果ててしまったそうです。現在は、復元された大手門の脇に土塁が残り、門をくぐると土塁で囲む形に郭になっています。その奥の本陣の部分はすっかり山林田畑と化しており、所々に立っている「長屋跡」「井戸跡」などと書いた標柱が往時を偲ばせるだけとなっています。

#### 〔江戸幕府・旧幕府軍〕

安政元年(1854)、江戸幕府はアメリカと神奈川条約を結び、翌年3月から箱館港を開くことになり、

箱館周辺の地を松前藩から上知させ奉行を配置して事に当たらせることとし、竹内保徳・堀利熙兩名を任命しました。その後幕府は和人地以外の東北蝦夷地を松前藩から上知させて箱館奉行に管轄させました。奉行の政庁には松前藩の旧箱館奉行所が当てられましたが、庁舎は狭く防御も弱いという欠点もあり、安全な場所に移そうとして現在の五稜郭の地に本城を築きそこに政庁を移すこととなりました。これがいわゆる**五稜郭**です。

この城は蘭学者の武田斐三郎が西洋の築城書をもとに設計した日本最初の西洋式保塁で我が国最大のもので、(国内に同形の物は長野県臼田町の龍岡城がある。)工事は安政4年に着工され8年の歳月を経て元治元年に完成しました。石垣を積み重ねた土塁が五稜星型なので五稜郭と呼ばれていますが、それは俗称で正式には「亀田役所土塁」といいます。

五稜郭を本拠とする幕府箱館奉行所の行政は慶応4年(1868)まで続き、明治維新後、新政府は箱館裁判所(のち箱館府)を設けました。しかし、明治元年(1868)10月26日旧幕府軍の榎本武揚等に占領され、つかの間の「蝦夷共和国」の拠点となりましたが、翌年5月18日の降伏開城によって箱館戦争は終わりを告げました。

五稜郭内は建物のほとんどが大被害を受け、庁舎も同5年(1872)に解体されました。

五稜郭を政庁として北海道を一時的に支配した旧幕府軍は、官軍の奪回を予想して五稜郭を中心に防御を固め、特に主戦場となることが想定される渡島平野南端の押さえとしての強力な防御施設が必要で、その必要性から**四稜郭**を構築しました。明治2年4月、昼夜兼行で工事をし、南に門構えを設け、四隅に砲座を配した洋式の四稜堡塞が完成しました。5月初め、本多幸七郎率いる幕府伝習歩兵隊がここを足場として新政府軍と戦いましたが、実際の戦闘では数時間しか持ちこたえられず、守備兵たちは五稜郭に敗走しました。

四稜郭は五稜郭に対称してつけられた名称で、記録には新台場、神山台場の名で呼ばれ、その形から明治以降につけられた呼び名だそうです。

#### 〔台場〕

またこの時期、北海道に限らず各地に幕府あるいは各藩が設けた台場と呼ばれる施設が築かれています。台場とは、大砲を据えて、外国船舶の接近に対し、砲撃を加える目的で築かれたもので、砲台場というのが正しい呼び方ですが、台場と呼び馴わされています。北海道の台場には以下のように性格の異なる三通りの台場があります。

一つめは異国船の来襲に備え幕府が築いたもの、二つめは幕命で警衛を分担した諸藩が築いたもの、そして三つめが箱館戦争の際に旧幕府軍が来たるべき新政府軍との戦いに備えて築いた砲台です。

函館湾の湾口を守るために築かれた弁天台場・矢不來台場などは、一つめの幕府が築いたもので、**弁天台場**は現在函館ドック敷地の一部になっています。**矢不來台場**は現在雑木林になっているが土塁・空堀などが見られます。

## 5. アイヌのチャシ

さて、いままで紹介したのは和人(日本人)の築城した城でしたが、最後に紹介する「チャシ」はアイヌの人びとが築いたもので、現在のところ全道で500以上見つかり、まだ見つからない物や消滅してしまったものも含めると1000以上あったのではないかとされています。ですから、北海道の城郭の中では一番多いのがチャシといえるかもしれません。

では、チャシとは何でしょうか？ 以下チャシについて若干お話ししてみたいと思います。

### (1)チャシという言葉

チャシとは一般的には「砦」とか「城」と言われていますが、もともとはアイヌ語で「柵」とか「柵囲い」を意味する言葉で、チャシコツとは砦址を表します。このチャシ・チャシコツを漢字に当てた「茶志」「茶志骨」という地名は北海道のあちこちで見かけます。チャシの語源については金田一京助氏のアイヌ語源流説と知里真志保氏の古朝鮮語のサシ、チャシなどと関係が考えられるという説が

あります。

## (2) チャシの分類

北海道のチャシコツは自然の地形を利用したものが多く、地形をもとにした次の5分類がよく使われます。(はじめの4分類は河野広道氏が提唱したもので、最後の平地式は宇田川洋氏がそれに加えて提唱したもの)また、この分類の内いくつかを組み合わせた複合式と呼ばれるものも存在します。

- A 丘先式…岬や丘陵の先端を弧状の壕で区切ったチャシコツで最も一般的なもの。
- B 面崖式…崖に面する台地上に半円形または四角形の壕をめぐるもので、ピラチャシ(崖チャシ)とアイヌ語では言う。
- C 丘頂式…丘陵の頂上部に周壕をめぐるお供餅型のもの。
- D 孤島式…湖中や湿地中に孤立している丘や島をそのまま利用したもの。
- E 平地式…比高2m以下の低い立地のもの。

また、チャシの壕は直状、弧状、方形、半円状、円状などがあり、その数は1~3条掘り込まれているものが多い。

チャシで国史跡に指定されているものは陸別町のユクエピラチャシ、釧路市のモシリヤチャシ・鶴ヶ岱チャランケチャシ、浦幌町のオタフンベチャシ、静内町のシベチャリ川流域チャシ跡群、根室市の根室半島チャシ跡群などがありますが、モシリヤチャシ・オタフンベチャシは丘頂式、ユクエピラチャシ、チャルコロフィナチャシ(根室半島チャシ跡群)は面崖式、シベチャリチャシ(シベチャリ川流域チャシ跡群)は丘先式になります。

## (3) チャシ研究小史

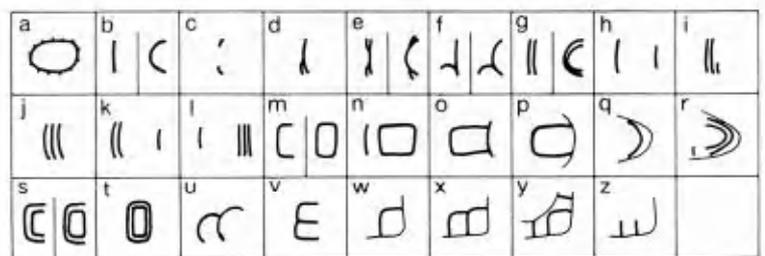
明治以前に書かれた古文書にチャシの記載のあるものは多くは紀行・日誌類ですが、最も古いものは17世紀のシャクシャインの蜂起(寛文9年・1669年)に関係するもので、シャクシャインがチャシに立て籠もっていたことを示す記載があります。

また、寛永20年(1643)、北海道東海岸に

来航したオランダ船カストリクム号の乗組員の航海日誌には、住居・柵・高い足場などの構築物があったことを伝えています。

明治以降、初めてチャシについて研究したのは河野常吉氏で明治39年(1906)に発表された「チャシ即ち蝦夷の砦」にチャシ研究は始まると言えます。そして、昭和33年(1958)『網走市史』所収の「先史時代編」の中で河野広道氏がチャシの分類を試み、上記の4つに大別しています。

昭和48年、北海道教育委員会は初めて全道規模のチャシ分布調査を実施し、341基のチャシを確認しました。(現在では545基のチャシが確認されているそうです。)また釧路市桂恋フシココタンチャシ・釧路町遠矢第2チャシ・弟子屈町サンペコタンチャシでは全面発掘が行われ、堀に沿って柵列が確認されたり、築造年代も判明しました。しかし、こうした例は少なく、いまだに基本的なデータ



	A 丘先式	B 面崖式	C 丘頂式	D 孤島式	E 平地式
a					
b					
h					
m					

図3 チャシの壕の形状と形態模式図

(『アイヌ考古学研究・序論』より)

の集積に止まっているといえるでしょう。

#### (4) チャシの機能

チャシの機能としては戦争の場(砦)、祭式を行う場、チャランケ(談判)の場、鮭漁などに関係した見張りの場などが考えられています。各チャシに残る伝承も大きく分けて六つに分類され、第一に闘争伝承、第二に見張り伝承、第三に聖地伝承、第四に談判伝承、第五に人文神等の伝承、第六にこれら以外の伝承ということからもチャシの機能が上記のようなものであったことがうかがえます。また、そうした伝承のうち約半数が闘争伝承であることからチャシが一般的にアイヌの砦であるといわれるのもうなずけます。

#### (5) チャシの年代

チャシの年代は発掘調査の際に検出される火山灰の降灰年代をもとに推定されていますが、およそ16世紀から18世紀に位置づけられます。文献史料からも17世紀末中頃から18世紀末まで実際にチャシが機能していたことがうかがえます。チャシが砦として機能した最後は、寛政元年(1789)のクナシリ・メナシの戦いであり、クナシリ・メナシ地方のアイヌたちはチャシを築いて松前藩の戦いに備えています。このクナシリ・メナシの戦いの頃に築造されたと思われる根室半島のチャシの中には、壕をめぐらして郭を4～5つも構成して、軍事性を高めたと思われるものがいくつもあります。

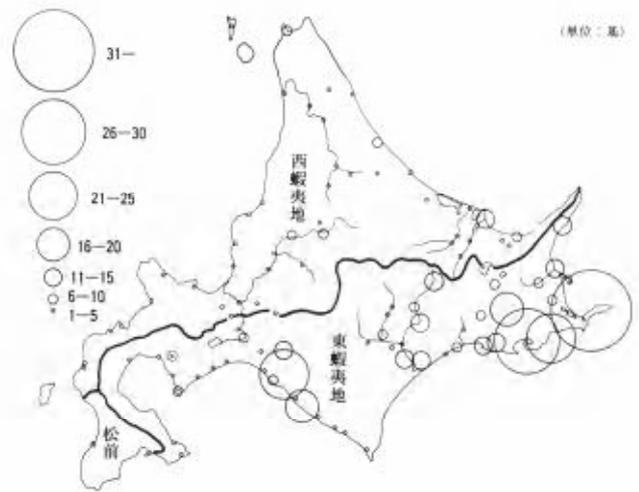


図4 市町村別のチャシ分布

(『アイヌ考古学研究・序論』より)

#### (6) チャシの分布

(3)にも書きましたが、現在、北海道チャシ学会により526ヶ所のチャシが確認されています。それらは概ね全道的な広がりを見せていますが、釧路・十勝・根室・日高支庁に特に集まっており、この4支庁で全道の約3分の2を占めています。さらに詳しく見てみると、釧路川・十勝川・利別川・静内川・沙流川・鶴川・石狩川などの流域、厚岸～浜中付近、根室半島部に集中しています。つまり太平洋側のいわゆる東蝦夷地に多いということは寛文年間のシャクシャインを惣大将とするメナシクルの勢力範囲と重なります。つまり、それ以前は祭場など神聖な地と機能していたチャシが、この時期を経て砦としての機能を強化していったとも言えそうです。

#### 【参考文献】

- 『日本城郭総覧』(歴史と旅臨時増刊 61/4) 秋田書店
- 『日本城郭大系1 北海道・沖縄』 新人物往来社
- 『図説中世城郭事典 一』 村田修三/編 新人物往来社
- 『日本古代文化の探究・城』 上田正昭/編 社会思想社
- 『北海道の歴史』 榎本守恵 北海道新聞社
- 『北海道の歴史』 田端 宏・桑原真人・船津 功・関口 明 山川出版社
- 『松前町史 通説編 第1巻下』 松前町教育委員会
- 『国別 城郭・陣屋・要害・台場事典』 西ヶ谷恭弘/編 東京堂出版
- 『アイヌのチャシとその世界』 北海道チャシ学会/編 北海道出版企画センター
- 『北海道のチャシ集成図I 道東北篇』 北海道チャシ学会 北海道出版企画センター
- 『アイヌ考古学』 宇田川洋 北海道出版企画センター
- 『北海道のチャシ』 北海道教育庁社会教育部文化課/編
- 『アイヌ文化成立史』 宇田川洋 北海道出版企画センター
- 『アイヌ考古学研究・序論』 宇田川洋 北海道出版企画センター